心理学教員として法学部に所属して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3828

心理学教員として法学部に所属して

山形恭子

法学部には教養部から配置換えとなり、約十年間を過させて頂きました。法学部に公共システム学科が新設されるにともなって（今は法科大学院創設によってなくなりましたが）、公共政策を心理学サイドから研究する役割を実験講座として担うことになりました。移籍当初は学科の理念やどのような貢献が心理学からできるのか、異なる研究領域間の連携はどのようにすればいいのかなどを模索して、自問自答を繰り返していたように思います。また、知人や多くの方々から法学部に心理学教員が所属していることは稀有であるといわれることも多く、一層、私自身の役割と貢献を意識させられました。しかし、ある時、政策系に所属している私の知人が「これまで通りで研究を変える必要はない」と助言を与えてくれたのを機会に特に意識する必要がないのではないかと思うようになり、楽な気持ちになったことを覚えています。このような次第で、それ以降は従来から継続中の研究や新たに興味をもった研究をマイペースで自由に追究し、学生の皆さんと一緒にいろいろな問題を考えつつ、過させて頂きました。ただ、実証研究を遂行するには教育・研究基盤が十分とは言い難く、困難な側面があったことは否めませんでした。

しかしながら、この十年の間に、公共政策との関連だけでなく、心理学と法学の連携が一段と進み、二〇〇〇年に「法と心理学会」が立ち上げられ、裁判関連の問題なども幅広く取り扱われ、欧米に劣らず、両領域を繋ぐ多数の研究もおこなわれ、また、著書も刊行されました（目撃証言の心理学、法と心理学のフロンティアⅠ・Ⅱ、法と心理学会叢書として取調べの心理学やマクマーチン裁判の深層など）。今後はこのような流れが加速されて、広く

深く法学と心理学の連携が進展するのではないかと期待しています。

ところで、法学部所属を通じて、この十年間に私にもたらされた変化を振り返ってみますと、主要なものとして、第一に研究の守備範囲や研究課題が拡大したことが挙げられます。これまで関心を寄せてきた認知発達心理学、発達社会心理学、教育心理学だけでなく、法学や学生の皆さんに触発されて応用社会心理学や反社会的行動・社会認識・規範意識などに関しても広く興味をもつようになり、これらの研究課題に取り組む契機を与えてくれました。第二に心理学が果たす役割や意義に関して他の学問領域との対比を通じてより深く理解・把握できたことが挙げられます。特に実証科学としての心理学の有用性を再確認しえたことは貴重な経験でした。第三に法学部はフレッシュな自由な雰囲気でしたので、その影響下で年齢にとらわれることなく、フレッシュな気持ちを保持して、研究に取り組めた点です（勿論、対比効果から年齢を意識することも多かったのですが）。このように、この間に、私がえたものが多く、むしろ、私が与えたものが皆無であったのではないかと危惧しています。幸いにも、教育・研究の場を引き続き与えられましたので、これらの経験を生かして、法学と心理学を繋ぐ、まだ緒についたばかりの仕事が何らかの形となるように今後努力したいと願っています。

最後に、法学部と皆様の一層の御発展を心からお祈り申し上げます。有難うございました。